性格の悪い　〇〇　の先生

早代さん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

性格が悪い先生が何とか魔法のある世界で生きていく話

目次

願い　1
二日目　12

願い

女教師「だから、1年A組の副担任と2年E組の副担任をやってください！今年の人事異動で人が足りないんです！」

○○「嫌ですよ。なんでそんなめんどくさい事を自分からやらないといけないんですか。（即答）」

かつて「超能力」と呼ばれていた先天的に備わる能力が「魔法」という名前で体系化され、
強力な魔法技能師は国の力と見なされるようになった。

もちろん、昔は、各国が核兵器をちらつかせて　一応安全　と言われていた。

しかし、化学の発展　未知の兵器は、その安定を揺るがす一大イベントとして、
覇権国は安定を確立し、支配し続けるために、挑戦する国は、
自分が覇権国になり支配するために

そして、そのドロドロとした欲望で起こるべくして起きた「第三次世界大戦」
人口爆発で地球のキャパシティーを超えた９０億人は、この戦争で１９６０年代と同じ３０億まで減少し
世界中に憎しみがばらまかれ、それと同時に魔法という兵器が世界を支配する手段として
有効だと証明された。

そして、２０年続いた第三次世界大戦が終結してから３５年が経つ西暦２０９５年…
魔法技能師養成とは名ばかりに、いつの日か戦争が来る時の兵器として…

○○（師匠から受け継がれた魔法は、こういう為に作られたんじゃない…）

このお話は、魔法を作った師匠の弟子が、２０９５年の世界に性格が腐りながら、先生として
国立魔法大学付属第一高校で働く物語。

弟子「こんちわー。この前、女教師に仕事を任された先生ですー。あの女　許せん。無理やり仕事を与えやがって！
これで死んだら労働局に訴えてやる（↑死んだら元も子もないことを分かってないアホ）」

ということで、今、入学式の教師用の席に座って、早く終わらないかを今か今かと待っています。
はえー、相変わらず一科生と二科生で差別意識が高いこと。キレーに分かれてるわ。ま、別にどうでもいいですが
今年の新入生代表は「司波深雪」さんか　へー…ＺＺＺ

ということで、入学式も寝てたのであっという間に終わりました。

「えーと?最初に、1年E組に行くかー」

1年E組の教室に向かいます。

「えーと?次は1年A組か」

1年A組の教室に向かいます。

1―A　担任「先生!!遅いですよ!皆さん失礼しました。私の隣にいるのが、副担任の先生です。」

「えー。私が1―A　の副担任です。担当教科は、「主に」社会です。よろしく。ではさよなら」ガラッ（教室を出ていく音）

1―A　&担任「ちょっと待ったーーーーー!!!!」

生徒A「先生あの人は一体何ですか!?第一高校の教師として、誇りもないんですか!?」

担任「誇りは…ないと思います。」

生徒A「なぜ!?給料はエリート学校だからたくさんあるはず!魔法の実験設備も充じt…「違うの!!」

担任「彼は、魔法を使って世界から悲しみをなくそうと努力してくれた…。」

「でも、私たちが、その努力を、その願いを壊してしまった」

担任は黒板に彼にあった悲劇を大きく書いた

「世界は、彼を世界初の戦略級魔法師として長年、監禁し、人体実験を行った」

二日目

こんにちはー

生徒から、変な先生と呼ばれている者ですー。
昨日、1年生の挨拶も終え、今日は授業が入ってないので、これから、暇になりました。

《中庭》

さーて！今から、中庭で寝るｋ「こんにちは！先生！」　っとおおおいい！」

○○「フフフ…　先生、何ですか　その声は（笑）」

先生「後ろからタックルされたら声くらい出るｗ　出ますよ…七草さん」

七草「抱きしめたんですよ　先生。　あと、いつも通りタメ口で話さないのですか？」

先生「七草さん。ココ　学校。　後、人前なので。」

七草「あら、ごめんなさい。ところで、何をしているのですか？」

先生「職員室に帰っているところです「嘘ですね」」

七草「今日、先生の授業は全クラスありませんよね？そのまま職員室にいれば良かったのでは？」

（なんで授業がないこと知っているの？）

先生「だから「会長ー！」　お！」

七草「あら、あ～ちゃん。どうしたの？」

中条あずさ（以下　中条）

中条「これから、風紀委員の人選をするって言ったじゃないですか！生徒会室に行きますよ！」

七草「ええ、わかったわ！　それでは、先生、またね！」

先生「おー。さいならー」

【キーンコーンカーンコーン】

（おっ？昼休みか。弁当作ってないし、食堂いくか。）

《食堂》

先生「やっぱり、食堂はいいね。値段安いし、自分で作らなくていいし…
これから、弁当作るの辞めよかな…」

（ん？あそこだけ、人だかりができている。もしかして、デザート売ってる？）

先生「行ってみよ…」

森崎駿（以下森崎）「司波さん、ウィードと相席なんて辞めるべきだ。1科生と2科生のけじめは、つけたほうがいいよ。」

千葉エリカ（以下エリカ）「はぁ??」

（うわー面倒なところに遭遇したー）

司波深雪（以下深雪）「あっ先生!」

（げっ…見つかったし。）

先生「こ、こんにちは、司波深雪さん。どうしたのですか?ほかの皆さんも集まって…」

1科生達「いいえ…特に、なにもありません。皆あっちに行こう。」

森崎の1科生の集まりは深雪さんらが座っているテーブルから去っていきました。

深雪「先生…ありがとうございます!」

先生「えぇ…どういたしまして?」(あれ、俺なんかした?)

深雪「そうだ!先生も一緒にランチを食べませんか?」

先生「(空きスペース探すの面倒だし)じゃあ…お願いします。」

《食堂でのお話》

先生「それでは、自己紹介を…と思ったのですが、皆さん、自分が副担任のクラスの方ですね。忘れてました。」

西城レオンハルト（以下レオ）「ひどいぜ　センセー。俺らの名前を忘れるなんてよ！」

エリカ「みんなの名前ならともかく、アンタの名前は長すぎて覚えられないでしょ」

レオ「なんだとー！」

柴田美月（以下美月）「まぁまぁ、落ち着いて…」

司波達也（以下達也）「ところで、先生、昨日の自己紹介が、簡潔すぎて驚いたのですがお急ぎだったのですか？」

先生「まぁ…ね。緊急の用事が入って忙しかったからですね…！」

達也「…そうなんですね。俺以外のE組の生徒も先生のことについて、知りたい人が

いるので、再度自己紹介をしてもらえたら、嬉しいです。」

先生「あー。了解しました。時間を作っておきます。」

深雪「…」

達也「深雪？どうかしたか？」

深雪「（…っ！）いえ！お兄様！深雪は大丈夫です！」

達也「ならいいんだが…」

《昼食も終わり、午後の授業も終わって、放課後》

《職員室》

先生「さて、明後日までの授業内容まとめ終わり！ちょっと早いけど（１６：５０）帰ｒ「【バンッ！】先生いますか!?」

先生「先生は本日の業務は終了したのでいません。」

七草「じゃあ〇〇さｎ　先生「その名前はヤメロ」……ゴメンナサイ」

七草「放課後の見回りに行きましょう!!」

先生「え？嫌だけ　七草「行きますよー」わかったから、職員室で魔法を使うな！部屋がなくなる！」

次回「放課後見回り！」